

フエとホイアンの歴史と文化

大谷莉紗、岡本翼、谷本樹、西江智哉、難波柚花 (岡山理科大学社会情報学科3年)

2017年9月1日～7日、私たちは山形眞理子教授・徳澤啓一教授の指導のもと、ベトナムで調査研修を実施しました(ポスター(1)チャーキョウ遺跡出土遺物の調査)。調査中、私たちはフエとホイアンに宿泊しました。どちらもユネスコ世界遺産に登録されています。このポスターでは、調査の間と休日に訪れたフエとホイアンの歴史と文化について報告します。また、調査終了後に東南アジア4ヶ国を1人で旅した岡本翼が、旅で感じたことを報告します。



阮朝王宮の入り口でもある王宮門(午門)



ティエンム寺にある仏塔トゥンヤン塔



顕臨園にある鼎



殻付きのココナッツを食べて休憩



ホイアンの代表的な名所である日本橋(来遠橋)



ホイアンを流れるトゥボン川



ホイアンの町並み



ランタン祭り当日の様子



ベトナムの民族衣装アオサイを着て街を散策



海のシルクロード博物館の内部



カンボジア・バンテイアイクティ遺跡にて

9月2日はベトナムの国慶(独立記念日)で、国民の休日でした。そこで私たちは1993年にベトナム初の世界遺産となった、フエの建造物群や博物館を見学しました。

まず、午前中に阮(グエン)朝王宮へ向かいました。阮朝王宮は1802～1945年の間、13代目の皇帝が君臨した王宮です。今回はフラッグ・タワー→大砲→午門(入口)→太和殿→右廡→左廡→太平樓→長生宮→世祖廟→顕臨園→顕仁門(出口)の順番で見学をしました。祝日なので人が多く、また日差しもすごく強かったため散策するだけでもかなり大変でした。阮朝王宮の中で私が一番印象に残ったのは、顕臨園にある第2代皇帝ミンマン帝によって造られた、9つの大きな3本脚の鼎です。実際の大きさは自分の身長かそれ以上あり、インターネットやガイドブックの写真から想像していた大きさを遙かに上回っていました。また事前の調べでは、鼎にはそれぞれ各皇帝を象徴する漢字1文字が刻まれているとあったので探してみました。残念ながら見つかることはできませんでした。

午後は阮朝王宮にあるフエ宮廷古物博物館を見学しました。フエ宮廷古物博物館は、阮朝時代に宮廷で使用されていた玉座、衣装、日用品などを陳列している博物館です。ここでは、自分がゼミの発表のために調べた阮朝の礼服を実際に見ることができました。私が調べた礼服は赤と黒で柄もシンプルでしたが、博物館の展示を見ると黄色やオレンジ色などがあり、衣装に描かれている文様も多く取り入れられていて、派手なものも多くありました。

博物館見学が全て終わった後は、川船に乗ってフエ郊外にあるティエンム寺へ行きました。ティエンム寺は1601年に造られ、仏塔はトゥンヤン塔といわれ、高さ21.24mの七層八角形の建物です。ティエンム寺で私が特に印象に残ったのは、ベトナム戦争中に焼身自殺した住職の写真です。住職は燃え盛る炎の中で絶命まで姿勢を崩さなかったり、体が焼け落ちて心臓は形を保ったまま残り、その不滅の精神を体現したと言われているそうで、そのことから私は最後まで自分の意志を尊重する住職の執念の深さを感じました。

国民の休日のため調査はできませんでしたが、フエの建造物群や阮朝時代の貴重な展示品から、阮朝の歴史や文化を知ることができた一日でした。(担当: I15V062 難波 柚花)

9月3日、4日、5日はホイアンに宿泊しました。ここから調査地のチャーキョウ遺跡まで車で通いました。調査終了後ホテルに戻ってから、毎晩、ホイアンの見学に出かけました。

ホイアンは古くはチャンパ王国の時代から阮王朝時代にかけて、中国・インド・イスラム世界を結ぶ海上交易の中継地点、国際貿易港として栄えていました。そして16～17世紀には朱印船に乗って日本の貿易商人もこの地を訪れるようになり、日本町が形成されました。しかし、江戸幕府の鎖国政策により、町は衰退への道を歩むこととなります。日本町が衰退するのとは逆に、華僑の人々が多く移り住んだため、現在の中華風の町並みへと変化しました。そんな歴史の深いホイアンを、今回は夕方から夜にかけて、3日に分けて回りました。なお、ホイアン旧市街のスポットを巡るには総合チケットが必要で、値段は1枚12万ベトナムドン(日本円で約600円)でした。このチケットで5カ所のスポットを選んで回ることができます。

まず初日はみんなで日本橋(別名、来遠橋)とサーフィン文化博物館に行きました。日本橋は1593年に当時ホイアンに住んでいた日本人によって架けられたそうです。橋の中央には小さな寺が造られています。サーフィン文化博物館ではチャンパ文化以前の紀元前数世紀から紀元後2世紀頃までの鉄器時代の文化、すなわちサーフィン文化についての展示を見ました。この文化はベトナム中部で栄えたと考えられており、甕棺墓が特徴的です。

2日目はちょうどランタン祭り当日だったので、ランタン祭りのほうへ実際に足を運んでみました。ランタン祭りとは毎月旧暦の14日(満月の夜)に開催される祭りで、開催理由はホイアンが古くからランタンの産地であったことだとされています。そんなランタン祭りが開催される時間帯は大体19:00～21:30頃までで、この日は特に外国人観光客が夜遅くまで歩いていました。実際、今回(9月4日)も人が多く、歩く場所がないほどでした。

最終日は海のシルクロード博物館を訪れました。この博物館は伝統的な町家建築を修復して造られた博物館で、ホイアン周辺で発掘された陶磁器や沈没船から引き上げた遺物など約100点が展示されています。また、日本町や御朱印船を描いた絵巻の写真などからはホイアンでの日本人の暮らしの一端を垣間見ることができます。

今回、自分がゼミ発表のために事前に調べたホイアンという地を実際に訪れることができたと感じています。なぜなら、ホイアンという町がなぜチャンパ時代に中継貿易都市として栄えたのか、それを町の造りから、事前に調べた内容と合わせてさらに理解を深めることができたからです。また機会があれば、ホイアンを訪れたいと思います。(担当: I15V012 大谷 莉紗)

ベトナム中部での調査終了後、私は皆と別れて、一ヶ月の東南アジア周遊一人旅を続けました(9/7～9/8 ベトナム、9/8～9/21 タイ、9/21～9/30 ラオス、9/30～10/5 カンボジア)。大きなトラブルにも出くわす事なく無事に旅を終えることができました。今回訪れた4ヶ国は日本と違う点が多く、それらが興味深かったです。ラオスでは、ムアンゴイという山間にある小さな村を訪れました。日本の山間部にある小さな村では高齢化が進み、若い人はほとんど見ないと思うのですが、ラオスでは小学生や中学生などの若い人の割合が多く驚きました。そして日本で非常に少子高齢化が進んでいる事を身をもって感じました。一方で、日本は非常に豊かで過ごしやすい国だとも感じました。訪れた4ヶ国とも物々しい人を頻繁に見かけたし、カンボジアでは数分歩くだけでトゥクトゥクのドライバーが売春や麻薬の話をつく持ちかけてきました。今までこのような光景を目にした事が無かったのでとても衝撃的でした。経済的な豊かさや治安の面では日本に及ばないかもしれませんが、若い人が多く活気溢れる東南アジアの国々はとても魅力的で、日本とは違った豊かさがあると思いました。

英語の能力などの面で自分の未熟さを痛感した一方で、異文化に触れる事で多くの事を感じ、多少なりとも成長出来た今回の一人旅は、とても実りあるものになりました。また機会があれば外国に出て、より多くの事を感じ、この目で見たいと思います。(担当: I15V014 岡本翼)

調査でお世話になったベトナム人の方々:
グエン・キム・ズン博士、グエン・ホアン・バック・リン先生、グエン・フウ・マイン先生、グエン・ティ・テュエット先生、チャン・キー・フォン先生、ありがとうございました!